

セルフエフィカシー育成の手法を用いた、 学習意欲向上の授業づくり

学籍番号 199328

氏名 大所眞吾

主指導教員 井上功一

1. はじめに

1.1 背景・目的

PISA調査などの国際比較調査を通じて、ここ20年間で日本の子供たちの学習意欲の低下が問題視されている。学校実習やスクールサポーターを通じた学校での子供との関わりの中で「勉強が面白くない」という子供たちは多いと感じており、実際に小中学生の多くは「しなければならぬから」という義務感のようなものから勉強に取り組んでいることが明らかになっている。学校実習で訪れている小学校の子供たちも例外ではなく、学習意欲の低さをうかがわせるような言動が多く認められ、学級担任教員からは学習に対して自信がないのではないかという話もあった。学習意欲が低い原因は、学習に自信をもって取り組めていないからであると仮定し、「学習に自信を持って取り組むことができる状態」を学習意欲が高い状態であると定義した。

本実践研究の目的は、学習意欲を学校教育活動内の取り組みで向上させることである。そのため高まることで自信をもって行動ができるようになるセルフエフィカシー（自己効力感）を学習意欲の指標とし、一般性セルフエフィカシーの値の上昇を目指した。

1.2 セルフエフィカシーについて

セルフエフィカシー（自己効力感）は、Bandura が『社会的学習理論』で提唱した概念であり、「ある行動を起こす前にその個人が感じる遂行可能感、自分自身がやりたいと思っていることの実現可能性に関する知識、自分にはこのようなことがここまでできるのだという考え」である。また、個人による能力の推測であり、セルフエフィカシーが高いほど目標に対して努力する傾向にあり、葛藤状況でも長期的に努力し続けることができたり自ら課題に積極的に取り組むなどの行動傾向が見られる。セルフエフィカシーは自然発生的に生じてくるものではなく、育成することが必要である。

2. 研究方法

体育の授業を1単元行い、その前後で子供たちのセルフエフィカシーの変化を見る。セルフエフィカシーの尺度として用いるのは、坂野・東條らが作成した一般性セルフエフィカシー（GSES）を利用した。これは「行動の積極性」「失敗に対する不安」「能力の社会的位置づけ」の3つの要素から構成されており、その値を最高16点、最低0点として数値化し、実践前後で比較・分析した。また、授業内外での子供たちの様子や学習カードの記述

内容などを利用し、実践前後の子供たちの様子を比較した。

3. 実践

3.1 授業手法

セルフエフィカシー育成の手法のうち「①成功体験②代理的体験③言語的説得④情動的喚起」に着目し、これらに準じた手法を工夫し用いた体育の授業を1単元実施した。授業は基本的にTTで行い、主に実践研究者がT1として授業を進め、学級担任はT2として協力していただいた。

3.2. (i)第6学年でのプレルボールを用いた実践

対象とした子供たちはボールスポーツに消極的な子供たちが少なくなくチームを単元中は固定し、子供たち同士の教え合いや声掛けが盛んになるような環境を設定した。導入では子供たちがイメージを持ちやすくするようにゲームの流れや雰囲気がわかるような内容と、基本的な技能の説明が入ったモチベーションムービーを使用するなどした。子供たちは自らプレルボールについて調べるなど、熱心に取り組む姿が確認できた。

3.3 (ii)第4学年での壁倒立などを用いた実践

ゲーム感覚でトレーニングを行ったり、自分の成長を自ら感じることができるよう仕掛けを授業内に設定した。またグループ学習で子供たち同士で声を掛け合うような場面を設定することで、子供たちは意見共有を積極的に行い、練習方法を工夫するなどの様子が見られた。

3.4 (iii)第5学年でのハンドバレーボールを用いた実践

子供たちに適切なオリジナルのスポーツを開発し、教材とした。授業のめあてや活動のねらいを理解できるようにし、毎時間成長を実感できるように指導者からの声掛けや学習カードを用いたフィードバックを行い、子供たち同士での声掛けも価値づけた。またゲームを場面ごとに区切ってその中での役割を意識できるようにした。

3.5 結果と考察

セルフエフィカシーの一要素である「能力の社会的位置づけ」、さらにその中の「友達よりも活動をうまく行える自信がある」「友達よりも、よく知っていることが1つはある」の項目で有意な向上が認められた。これは、授業内で自らの役割において努力することができている状態を自他に承認されたからではないだろうか。

4. まとめ

体育の授業を行うことで、セルフエフィカシーの一要素である「能力の社会的位置づけ」を向上させることができた。つまり、体育の授業をセルフエフィカシー育成の手法を意識し行えば、子供たちの一般性セルフエフィカシーの値を上昇させることができ、学習意欲を向上させられる可能性が示唆された。また、体育だけにしか応用できないものではないため、様々な教科に応用することで子供たちの学習意欲向上の一助となる可能性がある。